

オーストラリア 留学レポート

第3回 内田優花 2021.8～2025.8



#Melbourne

ご挨拶



初めまして。森村103期だった内田優花です。2021年8月に Trinity Collegeに入学し、メルボルン大学のBachelor of Artsでアジア学専攻・韓国学を副専攻、2025年8月に卒業しました。私のレポートがオーストラリアや留学に興味を持っただけの機会になれば嬉しいです。

今回は

[目次]

- 卒業式の様子
- オーストラリアのアイデンティティ観
- “You’ re Australian”
- オーストラリアで気が付いた自分を追い込まずに結果を出す方法
- 終わりに

卒業式の様子



卒業式前に友達や家族と写真を一緒に撮るのがメル大の恒例行事です。メルボルンで一番仲良くしてた二人が来てくれました:)



自分が持っているテディベアは左にいる友達がプレゼントしてくれたもので、大学公式キャラクターのバリーです。



卒業式の様子



卒業式は世界遺産に登録されている王立展示館 (Royal Exhibition Building)にて2～3時間にわたって行われました。生徒は皆んな学部の学長の方と壇上に上がって写真撮影をします。名前を呼ばれ数百人の前に出ていくので少し緊張しましたが学長の方が優しい方で目を見て“Congratulations”と言ってくれました。



卒業式の様子



プロのカメラマンが写真を撮ってくれるブースがあり、式典後に妹と撮影しました。妹が家族ではなく友達だと間違われて爆笑しているのが右の写真です笑



卒業式の様子



卒業式の様子

メル大で卒業写真を撮るのも恒例行事。写真の仕事をしている友達がたくさん撮ってくれました。



自分もよく使ったArts Westという建物で偶然にも祖先に遭遇！

卒業式の様子



最終学期に専攻科目を担当して
くださったJohn先生と

学生証を首からかけてプレゼン
風授業を思い出します



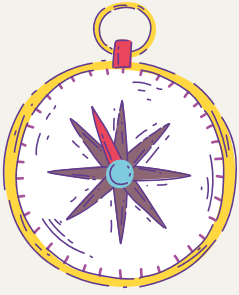
オーストラリアのアイデンティティ観

私は新しい場所に住むとその地に馴染むことが大事だと考えています。特にその地の言語を現地の人レベルにまで引き上げようとします。なので、英語は意味が伝われば良いという考え方もありますが、私は英語圏に住む限りできるだけ英語を上達させなければならないと考えながら過ごしていました。英語の喋り方もオーストラリアのアクセントをできる限り吸収しました。そうすることによって現地の人と外国人に対する対応とオーストラリア国民に対する対応を比較することができました。

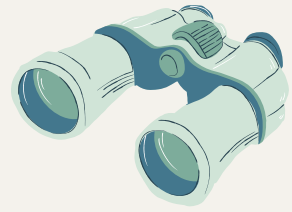
そこで分かったことは、人にもよりますがオーストラリア人は外国人と国民をあまり区別していないことです。オーストラリアは移民国家なのでアボリジニの方々以外は皆元々違う国からやって来ました。なので「オーストラリア人」の定義は「自身をオーストラリア人だと認識していること」です。ジェンダーのように自分のアイデンティティは自分で決めることが印象的でした。例えばイタリア人の両親を持つ子供がオーストラリアで育ったとしてその子が自身を「イタリア人」、「オーストラリア人」、「イタリア人でありオーストラリア人」と、どの自認の仕方をして構わないんです。あなたは親がイタリア人だからイタリア人、あなたはオーストラリアで育ったからオーストラリア人でしょと決めつけるのはタブーです。他の例として中国から10歳の時にやって来てそれからずっとオーストラリアに住んでいる子で自身を「中国系オーストラリア人」と認識している人もいます。

このように、いつオーストラリア住民が「オーストラリア人」と自認し始めるのか、又は全くオーストラリア人というアイデンティティを受け入れないのかは見た目で分かりません。外国人と自国民の線引きが曖昧なんです。だからオーストラリアの人たちは初対面で皆平等に接します。





“You’ re Australian”



日本に帰る前日にメルボルンで一番仲が良かった友達と出かけました。その子のご両親は日本人ですが生後数ヶ月でオーストラリアに移り住みました。いつも自分達は日本語と英語をまぜながら話していました。その日に聞いてみたのは「自分と文化の違いを感じることはあった？」ということでした。お互い日本とオーストラリアの文化に触れながら生活していたけど私は元々日本社会からやって来た人間で相手はオーストラリア社会にしか住んだことがありません。何かしら文化の違いは感じていただろうと思いながら聞いた質問でした。相手の答えは "Not really, you’ re Australian" 「そんなに。ユウカってオーストラリア人じゃん」と言われておったまげました。まず、自分はオーストラリア社会に包摂されたんだと感動しました。次に自分の友達がオーストラリアで生まれたわけでもオーストラリアで育ったわけでもない私を同じグループの人間だと宣言したことに驚きました。自分だったら外国からやって来た留学生を「あなたは日本人だよ」ということが果たしてあるだろうかと考えました。「あなたは日本で育ったかのように日本語が上手い」などの比喩として「あなたは日本人だよ」ということはあっても友達のように「あなたは日本文化の一員です」と外国人に伝えることはおそらくないという結論に至りました。オーストラリアの受容性に心打たれた帰国前夜でした。



オーストラリアで気が付いた自分を追い込まずに 結果を出す方法



①休む

長く走ってゴールまで到達するには休むことも大切です。ずっと100%のエネルギーで走っているとショートしてしまうことがあります。なので「疲れたら休む」。これに限ります。ちょっと休みすぎなくらいがちょうど良いです。私自身栄養失調になって授業に出られなくなった時がありました。いつも限界を超えて作業していたからです。これからはもっとセルフケアを心がけようと思っています。

②完璧主義を捨てる

これは休むことと似てますが「ある程度」タスクを仕上げるのが大切です。完璧を求めすぎて締め切りを逃しそうになることはありませんか？個人的にタスクは完璧であることより完了することの方が大事だと考えています。ちょっと手を抜いてもいいからまず全部終わらせましょう😊

オーストラリアで気が付いた自分を追い込まずに 結果を出す方法

③趣味を続ける

趣味を続けていると生活においての気づきが降ってくることがあります。私はダンスを中学生の時から続けているのですがメルボルンのダンススタジオに通っていた時に先生にダンスのアドバイスを求めると「あなたの踊り方は緩める部分が欠けている。常に動きが緊張している」と指摘されました。その時にこのアドバイスはよく自分の生き方を反映していることに気がつきました。

平日でも休日でも家でも学校でも電車の中でも日本にいた時は常に勉強していました。自分を勉強づけにすることで勉強することへの抵抗をなくしていたんです。この方式が日本では通じていたのですがオーストラリアでも当然続けようとしていたのですがいくらでも勉強できてしまう分野を学んでいたのが苦しくなりました。

このダンスの先生が言う通りメリハリが大事なのではないかと思います。必要な時だけいつも以上のエネルギー量を出して課題を終わらせ、あとは休むことを心がけました。そうすることでこの方が作業をダラダラ続けなくて済むし、余った時間はリフレッシュに使えることが分かりました。

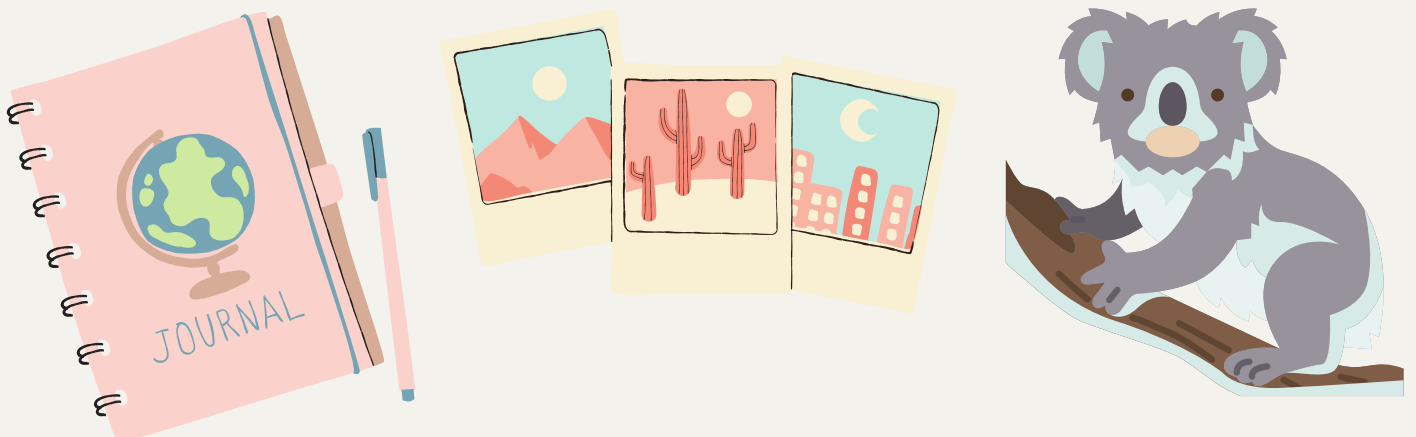
あと、もう一つ趣味の意義として救いになることがあります。日本にいた時、勉強は私のほぼ全てでした。本当に思い入れの強い教科だったので毎回満点を取ろうとしていた英語で86点をとった時なんだか自分は価値がないもののように思えて泣きました。そのくらい自分を追い詰めていました。全てを勉強に捧げると勉強で挫折した時に本当に辛いです。少ない時間の中でも好きなことを追いかけていると悩みを忘れられたり、勉強が上手いいかなくても自分にはこのスキル・知識があると気持ちの整理や安定化につながります。

終わりに

自分にとって留学はキラキラしている時が20%、苦しかったり頑張っている時が80%だったように思われます。ストレスで学期中に不眠症になったり常に家のどこかが壊れていたり常に変化する社会に適応しなければならなかったりとどこかそわそわしながら過ごしていました。でも楽しい時は200%楽しくて全部上手くいく時もありました。オーストラリアに慣れてきたかなと思ってても毎年新しい発見があって、それだけで留学して良かったと思いました。日本より変化の激しい社会にいたから発見があったのかなと思っていたのですが日本社会に戻って来ても以前は感じなかったことに気がつくようになって自分がオーストラリアで得たものの一つは社会の観察力だったんだなと最近実感しています。

なぜこんなに自分はオーストラリアに惚れ込んでいるのか考えてみたのですが、それはメルボルンの人々でした。私はメルボルンの多様性を愛しています。一つの町で色んな国の文化を体験できるし、嫌なことがあったら全員ではないけど話に共感してくれる人が絶対にいます。入れ替わりが早い街なので次帰った時に会いたい人がいるかは分からない、だからこそ自分は2021年から2025まで留学して本当に良かったです。そうでなければ会えない人にたくさん会えました。大学生時代に自分の価値観をありえないくらい揺さぶった人達に出会えたことは自分の一生の宝物です。満足のいく留学の終わり方をできて幸せです。

私のストーリーのどこかに面白さを見つけていただけたら本望です。ここまでご覧いただき、ありがとうございました！



終わりに



See you next time!